

模擬難聴システムを用いた実環境音下における
サイン音認知に関する研究

A Study on auditory signals Recognition under Real-World Noise with
Hearing Loss Simulation

学籍番号：201921625

氏名：大中 悠生

Onaka Haruki

日本社会の総人口は減少する中で、高齢化率は上昇している。近年様々な報知音やサイン音が周辺環境や製品に関する情報を伝達するのに用いられているが、その多くが高齢者の可聴域外となっており危険な状態であることが指摘されている。またこれらの実験には防音室等で録音されたものを用いており妨害音の影響は考慮されていない。加齢性難聴者が妨害音のある実環境下でサイン音をどのように聴いているのかわかっていないことは問題であると言える。そこで本検討では実環境音下で加齢性難聴者がサイン音を聴いて抱いた印象と健聴者が抱いた印象との違いを明らかにすることを目的として実験を行なった。実環境音にサイン音が含まれた音とそれに模擬難聴処理を施したものを健聴者に聴かせ、指定した形容詞対によって評価を行わせた。

研究指導教員：寺澤 洋子

副研究指導教員：平賀 譲